

【 復活のトロパリ 第4調 】



しゅのおんなでしはふくかつのひかるおと
主女弟子は復活の光おと

づれをてんしよりききうけて、
づれを天使より聞きうけて、

げんそよりのていざいをふるいすて、しと徒
げんそよりのていざいをふるいすて、しと徒

にほこりていえり、しはほろぼさ
にほこりていえり、しはほろぼさ

れ、ハリストカミはふくかつして、せかいに
れ、ハリストカミはふくかつして、せかいに

おおいなるあわれみをたまえり。
おおいなるあわれみをたまえり。

【 日本の亜使徒聖ニコライのトロパリ 第4調 】



しととひとしくどうざなるもの、ちゅう
使徒等同座なるもの、ちゅう

じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい
じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい

なるしんにえられたるふえ、ハリストのあい
なるしんにえられたるふえ、ハリストのあい

にみちたるうつわ、わがくにのこう
にみちたるうつわ、わがくにのこう

しょうしゃ、あしとしゅきょうせいニコライ
しょうしゃ、あしとしゅきょうせいニコライ

よ、なんぢのぼくぐんのため、および
爾羊群た爲お及

ぜんせかいのたために、いのちをたもうせい
全世界た爲生ち命賜うせ聖

さんしゃにいのりたまえ。
三者祈給え。

【 日本の亜使徒聖ニコライのコンダク 第4調 】

こうえいはちちとこいとせいしんにき
光栄父子と聖いしんに歸

す、

せいせいしゃあしとせいニコライよ、わが
成聖者亞使徒聖我

くになんぢをたびびとおよびいほうじんとうけ
國爾旅人及異邦人受

しに、なんぢははじめわがくににおいておの
爾は初我國お於己

れをがいらいしゃとしりたれども、ハリストの
外來者知れども、ハリストの

ひかりとあたたかきをながし、なんぢのて
光暖かき流爾敵

きをぞくしんのことな爲し、かれらにか
屬神子た爲し、かれらにか



みのおんちょうをあたえ、ハリストのきょうかいをたて
 恩寵 與 教 會 建
 たり、いまこのきょうかいのためにいのり
 今 此 教 會 爲 祈
 たまえ、けだしわれらそのしよしはなん
 給 蓋 我 等 其 諸 子 爾
 ぢによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ
 呼 我 善 牧 者 慶
 べよ。

【 復活のコンダク 第4調 】



いまもいつもよよに、アミン。
 今 何 時 世 世
 わがきゅうせいしゅおよびしよくざいしゅはかみと
 我 救 世 主 及 贖 罪 主 神
 して、ちにうまれしものをかせより
 地 生 者 桎 梏
 ときて、はかよりふくかつせしめ、
 釋 墓 復 活
 ぢごくのもんをやぶりて、しゅさいとして
 地 獄 門 破 主 宰
 みっかめにふくかつしたまえり。
 三 日 復 活 給

司祭) (黙誦：聖なる神、^{せい}聖者の中に^{かみ}息い、^{せいじゃ}セラフィムより^{うち}聖三の^{いこ}聲を以て^{せいさん}歌頌せられ、^{こえ}^{もつ}^{かしょう}

ヘルヴィムより讃^{さんえい}榮^{ことごと}せられ、^{てんぐん} 悉^{ふくはい} くの天^{ばんぶつ} 軍^むより伏^{ゆう}拜^{ゆう}せられ、萬物を無より有
 となし、人^{ひと}を爾^{なんぢ}の像^{ぞう}と肖^{しょう}とに依りて造り、爾^よが諸^{つく}の賜^{なんぢ}を以て之^{もろもろ}を飾^{たまもの}
 り、願^{ねが}う者^{もの}に智慧^{ちえ}と明悟^{めいご}とを與^{あた}え、罪^{つみ}を行^{おこな}う者^{もの}を棄^すてずして、其^{その}救^{すくい}の爲^{ため}に
 痛悔^{つうかい}を立て、我^た等卑^{われらいや}しくして不當^{ふとう}なる爾^{なんぢ}の諸^{しよぼく}僕^こを、此^{とき}の時に於^{おい}ても、爾^{なんぢ}が
 聖^{せい}なる祭壇^{さいだん}の光榮^{こうえい}の前^{まえ}に立ちて、爾^たに當然^{たてまつ}の伏拜^た讃榮^たを奉^たるに堪^たうる
 者^{もの}となしし主^{しゅさい}宰^{なんぢ}よ、爾^{なんぢ}親^{みづか}ら我^{われ}等罪^{ざい}人^{にん}の口^{くち}よりも聖^{せい}三^{さん}の歌^{うた}を受け、爾^{なんぢ}の
 仁慈^{じんじ}を以^{もつ}て我^{われ}等に臨^{のぞ}み、我^{われ}等に凡^{およ}そ自由^{じゆう}と自由^{じゆう}ならざる罪^{つみ}を赦^{ゆる}し、我^わが靈^{たましい}
 と體^{からだ}とを聖^{せい}にし、我^{われ}等に生^{しょう}涯^{がい}善^{ぜん}功^{こう}を以^{もつ}て爾^{なんぢ}に務^{つと}むるを得^えせしめ給^{たま}え、聖^{せい}
 なる生^{しょう}神^{しん}女^{ぢよ}と古^こ世^{せい}より爾^{なんぢ}の喜^{よろこび}を爲^なしし諸^{しよ}聖^{せい}人^{じん}との祈^き禱^{とう}に依^よりてなり、)

司祭) 蓋^{けだしわ}我^{かみ}が神^{なんぢ}よ、爾^{せい}は聖^{せい}なり、我^{われ}等光榮^{こうえい}を爾^{なんぢ}父^{ちち}と子^こと聖^{せい}神^{しん}に献^{けん}ず、今^{いま}も何^{いつ}時^{とき}も世^よ世^よ
 に、



【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る
 聖 神 聖 勇 毅 聖
 じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め
 常 生 者 我 等 憐
 よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い
 聖 神 聖 勇 毅 聖
 な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ
 常 生 者 我 等 憐
 め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、
 聖 神 聖 勇 毅



せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 の 者 の よ 、 我 等 を あ わ

れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん
れ め よ 。 光 榮 い は ち ち と こ と 聖 い し ん

に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。
に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン)。

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 の 者 の よ 、 我 等 を あ わ

れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う
れ め よ 。 聖 なる か み 、 聖 なる ゆ う

き ぎ 、 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を
き ぎ 、 聖 なる じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を

あ わ れ め よ 。
あ わ れ め よ)。

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 プロキメン 提綱 主日第4調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主よ、爾の工業は何ぞ多き、皆智慧を以て作り、

聖体礼儀② (第 21 主日 ルカ 83 端) - 5



誦經) 我が^{わ たましい}靈^{しゅ}よ、主^ほを讃^あめ揚^{しゅわ}げよ、主^{かみ}我が神^{なんぢ}よ、爾^{いた}は至^{おおい}りて大^{おおい}なり、



誦經) 主^{しゅ}よ、爾^{なんぢ}の工^{しわざ}業^{なん}は何^{おお}ぞ多^{おほ}き、



【 アポストロス 使徒經 203 端 ガラティヤ書 2 章 16 節～20 節 】

司祭) 睿智、

誦經) 聖使徒^{せいしと}パウエル^{じん たつ}がガラティヤ^{しよ}人に^{よみ}達^{よみ}する書^{よみ}の讀、

司祭) 謹^{つつし}みて聽^きくべし、

誦經) 兄^{けいてい}弟^{ひと}よ、人^{りっぽう}は律^{おこない}法^よの行^よに由^{あら}るに非^{ただ}ず、唯^{しん}イイスス・ハリス^{しん}トスを信^よずるに由^ぎりて義と
せらるるを知^しりて、我^{われら}等^{われら}もハリス^{しん}トス・イイス^{しん}スを信^{しん}ぜり、ハリス^{しん}トスを信^よずるに由^{りっぽう}り、律^{りっぽう}法^{りっぽう}
の行^{おこない}に由^よらずして、義^ぎとせられん爲^{ため}なり、蓋^{けだしりっぽう}律^{おこない}法^よの行^よに由^{ひとひとり}りては、人^ぎ一^ぎも義とせ
らるるなし。若^もし我^{われら}等^{われら}ハリス^よトスに由^ぎりて義とせられんことを求^{もと}めて、自^{みづから}も猶^{なお}罪^{ざい}人^{にん}たらば、
豈^{あに}ハリス^{つみ}トスは罪^{えきしや}の役^{しか}者^{けだしも}たるか。非^わらず。蓋^{こぼ}若^{もの}し我^{われ}が毀^{また}ちたる者^{これ}、我^た復^た之^たを建^たてば、
則^{すなわち}己^{おのれ}の罪^{ざい}人^{にん}たるを示^{しめ}すなり。我^{われりっぽう}律^よ法^{りっぽう}に由^{ため}りて律^し法^{かみ}の爲^{ため}に死^いせり、神^いの爲^いに生^いきん
爲^{ため}なり。我^{われ}ハリス^{とも}トスと共^{じゅうじか}に十^{てい}字^す架^{われい}に釘^{あら}せられたり。既^{すなわち}に我^す生^すくるに非^すず、即^すハリス
トスは我^{われ}の中^{うち}に生^いくるなり。我^わが今^{いま}肉^{にく}体^{たい}に在^ありて生^いくるは、我^{われ}を愛^{あい}して我^わが爲^{ため}に己^{おのれ}を捨^す
てし神^{かみ}の子^こを信^{しん}ずるに由^よりて生^いくるなり。

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ。人の義とされるのは律法の行いによるのではなく、ただキリスト・イエスを信じる信仰によることを認めて、わたしたちもキリスト・イエスを信じたのである。それは、律法の行いによるのではなく、キリストを信じる信仰によって義とされるためである。なぜなら、律法の行いによっては、だれひとり義とされることがないからである。しかし、キリストにあって義とされることを求めることによって、わたしたち自身が罪人であるとされるのなら、キリストは罪に仕える者なのであろうか。断じてそうではない。もしわたしが、いったん打ちこわしたものを、再び建てるのであれば、それこそ、自分が違反者であることを表明することになる。わたしは、神に生きるために、律法によって律法に死んだ。わたしはキリストと共に十字架につけられた。生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。しかし、わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神の御子を信じる信仰によって、生きているのである。

【 アリルイヤ 主日第4調 】

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾 に平安、

誦經) ^{なんぢ しん} 爾 の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) アリルイヤ、



誦經) ^{かみ なんぢ ほうざ よよ あ なんぢ くに けんべい せいちよく けんべい} 神よ、 爾 の寶座は世世に在り、 爾 の國の權柄は正 直 の權柄なり、



誦經) ^{なんぢ ぎ あい ふほう にく} 爾 は義を愛し、不法を惡めり、





司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん} 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の 浄き光を輝かし、我が思念
^{め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる 誠を
^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ} 畏るる 畏をも入れて、我等が 悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所
^{おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ} を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、
^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん} 爾は我が 靈と體との光 照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし
^{いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ} て生命を施す 爾の神とに光 榮を獻ず、今も何時も世に、アミン。)

【 エヴァンゲリオン 福音經 ルカ福音書 83 端 16 章 19～31 節 】

司祭) ^{えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん} 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



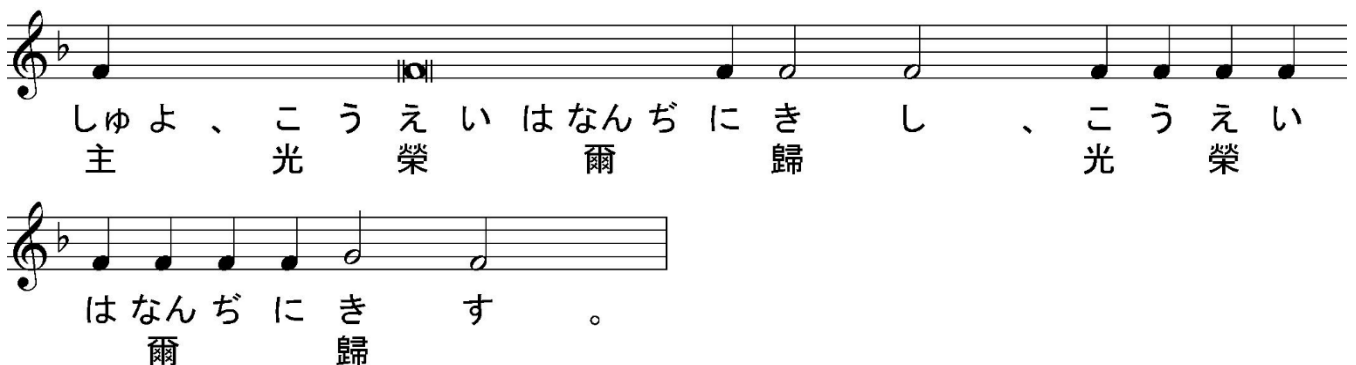
司祭) ^{でん せいふくいんけい よみ} ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) ^{つつし き しゅ さ たとえ もう い と ひと むらさきのうわぎ ほそきぬの} 謹みて聴くべし、主は左の 譬を設けて曰えり、富める人あり、紫袍と細布と
^{き ひびおご たのし またまづ もの な ぜんしんしゅもつ や と} を衣、日日奢り 樂めり。亦 貧しき者ラザリと名づくるあり、全身腫物を病みて、富める
^{ひと もん ふ そのしよくたく お くづ もつ はら み ほつ いぬ きた その} 人の門に臥し、其 食卓より遺つる屑を以て、腹を果たさんと欲せり、犬も來りて、其
^{しゅもつ ねぶ まづ ものし てんしら よ ふところ おく と もの} 腫物を舐れり。貧しき者死して、天使等に因りてアブラアムの 懷に送られ、富める者も
^{し ほうむ ちごく くるしみ うち あ かれそのめ あ はるか およ} 死して 葬られたり。地獄の 苦の中に在りて、彼其目を擧げて、遙にアブラアム及び
^{そのふところ あ み すなわちよ い ちち われ あわれ} 其 懷に在るラザリを見たり。乃 呼びて曰えり、父アブラアムよ、我を 憐み、ラザリを
^{つかわ そのゆび さき みづ みた わ した ひや けだしわれこ ほのお うち くるし} 遣して、其 指の尖を水に蘸して、我が舌を涼さしめよ、蓋 我此の 燄の中に 苦む。

しか 然れどもアヴラーム曰えり、子よ、^い爾^こは存^{なんぢ}命^{ぞんめい}の時^{とき}爾^{なんぢ}の善^{よき}を受け、ラザリは同じく其^う惡^{おな}
 を受^うけたりしを憶^{おも}え、今^{いま}彼^{かれ}は此^{ここ}に慰^{なぐさ}み、爾^{なんぢ}は苦^{くる}む。第^{ただ}此^{これ}のみならず、爾^{なんぢ}等^らと我^{われ}等^ら
 との間^{あいだ}に巨^{おおい}なる淵^{ふち}は限^{かぎ}れり、故^{ゆえ}に此^{ここ}より爾^{なんぢ}等^らに涉^{わた}らんと欲^{ほつ}する者^{もの}は能^{あた}わず、彼^{かれ}よ
 りも我^{われ}等^らに涉^{わた}るを得^えず。彼^{かれ}曰^いえり、然^{しか}らば父^{ちち}よ、請^こう、ラザリを我^わが父^{ちち}の家^{いえ}に遣^{つか}せ、蓋^{けだ}
 我^{われ}に五^ご人^{にん}の兄^{きょうだい}弟^{だい}あり、彼^{かれ}をして其^{その}前^{まえ}に證^{しょう}を爲^なさしめよ、彼^{かれ}等^らも此^この苦^{くる}の處^しに來^{きた}
 らざらん爲^{ため}なり。アヴラーム之^{これ}に謂^いう、彼^{かれ}等^らにモイセイ及^{およ}び預^よ言^{げん}者^{しゃ}あり、之^{これ}に聽^きくべし。彼^{かれ}
 曰^いえり、否^{いな}、父^{ちち}アヴラームよ、然^{しか}れども若^{もし}し死^{うち}の中^{なか}より彼^{かれ}等^らに往^ゆく者^{もの}あらば、彼^{かれ}等^ら悔^{かい}改^{かい}せ
 ん。アヴラーム曰^いえり、若^{もし}しモイセイ及^{およ}び預^よ言^{げん}者^{しゃ}に聽^きかずば、縦^{たと}い死^しより復^{ふく}活^{かつ}する者^{もの}ありと
 も信^{しん}ぜざらん。

(比較用 口語訳) ある金持がいた。彼は紫の衣や細布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮していた。ところが、ラザロという貧乏人が全身でき物でおおわれて、この金持の玄関の前にすわり、その食卓から落ちるもので飢えをしのぐと望んでいた。その上、犬がきて彼のでき物をなめていた。この貧乏人がついに死に、御使たちに連れられてアブラハムのふところに送られた。金持も死んで葬られた。そして黄泉にいて苦しみながら、目をあげると、アブラハムとそのふところにいるラザロとが、はるかに見えた。そこで声をあげて言った、『父、アブラハムよ、わたしをあわれんでください。ラザロをおつかわしになって、その指先を水でぬらし、わたしの舌を冷やさせてください。わたしはこの火炎の中で苦しみもだえています』。アブラハムが言った、『子よ、思い出すがよい。あなたは生前よいものを受け、ラザロの方は悪いものを受けた。しかし今ここでは、彼は慰められ、あなたは苦しみもだえている。そればかりか、わたしたちとあなたがたの間には大きな淵がおいてあって、こちらからあなたがたの方へ渡ろうと思ってもできないし、そちらからわたしたちの方へ越えて来ることもできない』。そこで金持が言った、『父よ、ではお願いします。わたしの父の家へラザロをつかわしてください。わたしに五人の兄弟がいますので、こんな苦しい所へ来ることがないように、彼らに警告していただきたいのです』。アブラハムは言った、『彼らにはモーセと預言者とがある。それに聞くがよかろう』。金持が言った、『いえいえ、父アブラハムよ、もし死人の中からだれかが兄弟たちのところへ行ってくれましたら、彼らは悔い改めるでしょう』。アブラハムは言った、『もし彼らがモーセと預言者などに耳を傾けないなら、死人の中からよみがえってくる者があっても、彼らはその勧めを聞き入れはしないであろう』。



※ 聖体礼儀③（金ロイオアン）へ